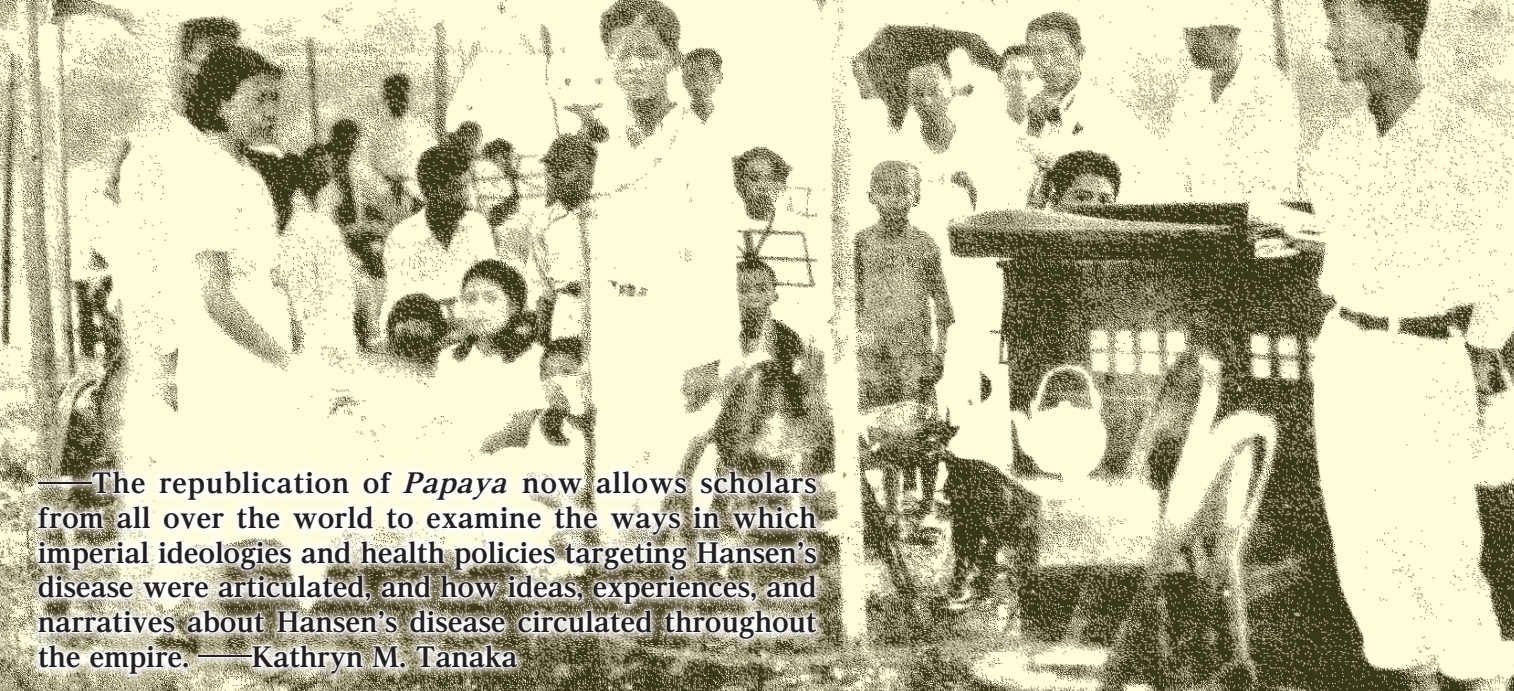


1937年6月24日、楽生院内での「瘰癧予防デー」ラジオ放送実況  
第4巻第3号、1937年9月。



—The republication of *Papaya* now allows scholars from all over the world to examine the ways in which imperial ideologies and health policies targeting Hansen's disease were articulated, and how ideas, experiences, and narratives about Hansen's disease circulated throughout the empire.—Kathryn M. Tanaka

## 戦前期・台湾の ハンセン病療養施設・楽生院の まぼろしの機関誌 『万寿果』(1935-1944)、 ついに復刻!



【推薦】  
**木村 哲也**  
(国立ハンセン病資料館学芸員)  
**田中 キャサリン**  
(兵庫県立大学准教授)

—昭和戦前期、ハンセン病政策の進展と歩調を合わせるかのように、全国各地の療養施設では北條民雄、明石海人、志樹逸馬はじめ多くの入所者たちが激しい想いととも、力強い「瘰癧文学」を生み出していった。

同じころ、植民地下台湾においても1930年に楽生院(台北)が開設された。そこでは台湾人、日本人を問わず、入所者のうちに高まった文学的な情熱の「受け皿」として、機関誌『万寿果』が創刊された。戦中をふくめ1944年の廃刊まで長期間にわたって発行され続けた本誌は、入所者の小説、短歌、俳句、詩、エッセイなどの作品群、そして台湾におけるハンセン病療養所の実態を伝える貴重な記録である。

植民地という状況において、ハンセン病という病いに向き合うことを余儀なくされた人びと、その想いが込められた雑誌『万寿果』は、今日ますますその輝きをまし、私たちを見つめている。

ハンセン病文学、植民地研究、台湾文学研究者はもちろん、医療史、近現代史研究において、『万寿果』は稀有な重要性を占める資料といえるだろう—

〈復刻版〉Papaya まんじゅか / Manjyuka

# 万寿果

解説・総目次・索引付 **全4巻**

【底本】『萬壽果』皇太后陛下御仁慈感激記念号 — 第10巻第2号  
(楽生院慰安会 発行、1935年4月-44年1月)

【解説】星名 宏修 (一橋大学教授)

揃定価: 83,600円 (揃本体76,000円+税10%)

ISBN 978-4-8350-8543-2

■ 楽生院の芭蕉林 (第7巻第1号、1940年2月)。

不二出版

# 〈復刻版〉万寿果 全4巻

【解説・総目次・索引付】

【解説】星名 宏修 (一橋大学教授)

【推薦】木村 哲也 (国立ハンセン病資料館学芸員)

田中 キャサリン (兵庫県立大学准教授)

【協力】国立ハンセン病療養所長島愛生園・国立台湾図書館

【揃定価】83,600円 (揃本体76,000円+税10%)

【体裁】A5判・上製・布クロス装・総約1,600頁 ISBN 978-4-8350-8543-2

【底本】『萬壽果』皇太后陛下御仁慈感激記念号

—第10巻第2号(1935年4月-1944年1月) ※未確認の欠号有。

【収録内容】(『万寿果』楽生院慰安会 発行)

巻数	巻号数	発行年月
第1巻	皇太后陛下仁慈感激記念号-第4巻第1号	1935年4月-37年3月
第2巻	第4巻第2号-第5巻第3号	1937年6月-38年12月
第3巻	第6巻第1号-第7巻第4号	1939年4月-41年1月
第4巻	第8巻第1号-第10巻第2号	1941年4月-44年1月



▲ 1937年10月15日、国民精神作興週間行事としてのラジオ体操の様子(第4巻第4号口絵より)。

お薦め先  
ハンセン病文学、近現代台湾文学、植民地研究、近代医療史、近現代史研究者、大学・専門・公共図書館

### 関連図書

#### 復刻版 愛生 〈戦前編〉全4回配本 全15巻・別冊1 (総目次・索引付)

揃定価◆ 316,800円 (揃本体288,000円+税10%)

体裁◆ A5判・上製・布クロス装・総約6,900頁

復刻にあたって◆ 山本典良 長島愛生園園長

推薦◆ 中尾伸治 長島愛生園自治会会長 廣川和花 専修大学文学部教授

松岡弘之 岡山大学文学部講師

協力◆ 国立療養所 長島愛生園・公益財団法人 長済会

1930年11月、台湾楽生院と時を同じくして、日本ではじめてのハンセン病国立療養所として開設された長島愛生園。創立からわずか半年後に刊行開始となった機関誌『愛生』を、戦争によって廃刊を余儀なくされる1944年7月号まですべて収録・復刻。ハンセン病療養施設における「療養」の営み、その実像に迫る、ハンセン病問題研究の基礎資料。

配本/刊行/定価/ISBN-No (978-4-8350)	巻数	収録号数/発行年月
第1回/2021年7月 揃定価 62,700円 (揃本体57,000円+税10%) 8436-7	第1巻	第1号(31年10月)-第7号(34年7月)
	第2巻	第8号(34年8月)-第12月号(34年12月)
	第3巻	第5巻第1号(35年1月)-第5巻第6号(35年6月)
	第4巻	第5巻第7号(35年7月)-第5巻第12号(35年12月)
第2回/2021年11月 揃定価 86,900円 (揃本体79,000円+税10%) 8440-4 別冊(総目次・索引)	第5巻	第6巻第1号(36年1月)-第6巻第5号(36年5月)
	第6巻	第6巻第6号(36年6月)-第6巻第10・11号(36年11月)
	第7巻	第7巻第1号(37年1月)-第7巻第5号(37年5月)
	第8巻	第7巻第6号(37年6月)-第7巻第11・12号(37年12月)
第3回/2022年2月 揃定価 83,600円 (揃本体76,000円+税10%) 8445-9	第9巻	第8巻第1号(38年1月)-第8巻第12号(38年12月)
	第10巻	第9巻第1号(39年1月)-第9巻第12号(39年12月)
	第11巻	第10巻第1号(40年1月)-第10巻第12号(40年12月)
	第12巻	第11巻第1号(41年1月)-第11巻第12号(41年12月)
第4回/2022年5月 揃定価 83,600円 (揃本体76,000円+税10%) 8450-3	第13巻	第12巻第1号(42年1月)-第12巻第12号(42年12月)
	第14巻	第13巻第1号(43年1月)-第13巻第12号(43年12月)
	第15巻	第14巻第1号(44年1月)-第14巻第7号(44年7月) 附『青年愛生』第1-4号(33年6-9月)

※発行年月はすべて西暦表記。ただし(19)を省略。

#### 近現代日本ハンセン病問題資料集成 全19巻・別冊2 補巻1-19 揃定価◆ 485,100円 (揃本体441,000円+税10%)

編・解説◆ 藤野 豊 (1-5、8、9、12-15)・訓覇 浩 (8)・清水 寛 (7)・平田 勝政 (7、16)・江連 恭弘 (10)・大竹 章 (11) B5判/A4判/上製

第1回配本・全2巻	補巻1・2 外島保養院年報 揃定価 39,600円 (揃本体36,000円+税10%) ISBN978-4-8350-5420-9
第2回配本・全3巻	補巻3 本妙寺事件・九州療養所関係・自治会沿革史/補巻4 大島療養所自治会日誌(戦前編)/補巻5 世界のハンセン病政策・近代初期日本のハンセン病 揃定価 82,500円 (揃本体75,000円+税10%) ISBN978-4-8350-5423-0
第3回配本・全4巻	補巻6 私立療養所/補巻7 台湾におけるハンセン病政策/補巻8 療養所長会議関係書類/補巻9 隔離政策の強化 揃定価 110,000円 (揃本体100,000円+税10%) ISBN978-4-8350-5569-5
第4回配本・全3巻	補巻10 ハンセン病と教育/補巻11 らい予防法闘争期の自治会日誌/補巻12 「らい予防法」改正問題Ⅲ 揃定価 82,500円 (揃本体75,000円+税10%) ISBN978-4-8350-5574-9
第5回配本・全3巻	補巻13 生活改善・反差別運動Ⅱ戦前期委任統治領「南洋群島」のハンセン病政策/補巻14 戦後無らい県運動Ⅱ/補巻15 戦後無らい県運動Ⅲ・生殖管理政策/別冊(解説・総目次(補巻1-15)) 揃定価 82,500円 (揃本体75,000円+税10%) ISBN978-4-8350-5578-7
第6回配本・全4巻	補巻16-19 『日本MTL』『風の籬』第1-264号/別冊(解説・総目次・索引) 揃定価 88,000円 (揃本体80,000円+税10%) ISBN978-4-8350-5687-6

振替 東京都区水道210104  
F A E 1120005  
A X L 003355988116677008544  
替 X L 003355988116677008544

不二出版

表示価格はすべて税別

# よみがえる植民地台湾のハンセン病文芸誌

星名 宏修

一九三〇（昭和五）年二月、日本の植民地統治下の台湾でハンセン病療養所の「楽生院」が運営を開始した。その翌年には日本「内地」で「癩予防法」が制定され、患者の隔離が強化される時期である。この強制隔離をきっかけに、「内地」の療養所では「癩文学」が盛んに創作されるようになった。そうしたなかで誕生した北條民雄や明石海人らの作品は、今日もお読み続けられている。

楽生院でも一九三五（昭和一〇）年に雑誌『万寿果』が創刊された。現時点では一九四四（昭和一九）年二月まで刊行されたことが確認できる、当時としてはかなりの長寿雑誌である。パイヤを意味する『万寿果』を発行した楽生院慰安会の会長には、台湾総督府の警務局長が就任した。当局のハンセン病政策を療養所の現場で実行する団体だが、機関誌の『万寿果』には収容された患者たちの内面を描いた多くの文学作品が掲載された。そのなかでも入所者の九割を占めた台湾人が日本語で詠んだ短歌や俳句、さらに漢詩や台湾語による創作は、植民地ならではのハンセン病文学といえる。また「高砂族」を詠んだ青山純三の「舌たらぬながらにかりつく友は蕃山の生活のうつろひをいふ」のような短歌も、「内地」の療養所では生まれえなかった。これまでのハンセン病文学研究が視野に入れてこなかった植民地における独特な表現を、『万寿果』からは読みとることができるのだ。

こうしたハンセン病者の創作だけでなく、『万寿果』には「まど・みちお」が本名の石田道雄（一九〇九―二〇一四）として執筆した「風船玉」という短文も収録されているが、これはあまり知られていないのではないだろうか。

さらに一九四〇（昭和一五）年の『万寿果』の表紙を藍蔭鼎（一九〇三―一九七九）が描いていることも、注目すべき点である。戦前の台湾を代表する画家の藍蔭鼎が、どうして楽生院の『万寿果』に関わるようになったのかは現時点では不明であるが、その表紙を口絵にカラーで収録した復刻版は、台湾美術史の研究にも大きな意味をもつだろう。

台湾総督府図書館の後身である国立台湾図書館は、『万寿果』を一部しか所蔵しておらず、今回の復刻にあたっては、その多くを長島愛生園神谷書庫の蔵書によった。あらためて感謝申し上げたい。同誌の復刻によって、台湾ハンセン病（文学）研究に新たな光があてられることが期待される。（ほしなひろのぶ・一橋大学教授）

## 推薦のことは

# 未知なるハンセン病文学と出会うために

木村 哲也

日本におけるハンセン病文学に関するテキストは、戦前の北條民雄や明石海人など「有名な」作家をはじめとして、一九二〇年代から二〇〇〇年代までの作品を網羅した『ハンセン病文学全集』全一〇巻（皓星社、二〇〇二―二〇一〇年）などにより、「無名な」書き手も含めて、今日ではあるていど把握できる条件が整いつつある。

しかしながら、日本植民地下の朝鮮や台湾のハンセン病療養所における文学の研究は、いちじるしく立ち遅れてきた。ひとえにテキスト自体を読める条件が整っていなかったことが最大の理由だが、その背景には私たち日本人が、過去に行ってきた植民地支配の現実から目を背けてきた事実が横たわっている。

台湾のハンセン病療養所・楽生院で発行されていた雑誌『万寿果』の研究は、本復刻の解説を執筆された星名宏修氏の個人的な努力によって進められてきた。

例えば宮崎勝雄、小崎治子、青山純三といった、これまで知られてこなかった楽生院の日本人入所者による文学作品をはじめ、余丙炭、林紅英、沈發達といった台湾本島人入所者の書き手たちもまた、日本語による短歌や詩のほか、台湾語、漢詩などさまざまなジャンルの作品を発表していたことを、私たちは星名氏の研究により教えられてきた。『万寿果』は、まさに日本の植民地統治下の縮図のような、民族や言語の混交の場でもあったことがわかる。

一部の作品が、隔離政策推進のプロパガンダの役割を担ったことは容易に指摘しうるが、その一方で「聖戦」や「皇軍」から排除されたハンセン病者の悲哀や、断種による「系図」の消滅、ハンセン病の傷痍軍人の「再生」という主題など、ハンセン病文学にしか表現できないような陰影に富む作品の発表の場ともなっていたのである。

現存する『万寿果』は、一九四四（昭和一九）年という終戦前の日付で終わっているが、ここに集った書き手たちが、いったいどのような戦後を生きたのかも気になる主題である。

私ごとくに注目したいのは、戦後、日本の療養所に引きあげて創作を続けた西羽四郎である。詩人・大江満雄の編集による『いのちの芽 日本ライ・ニューエイジ詩集』（三一書房、一九五三年）に参加した詩人だが、彼が戦前、楽生院で療養し、『万寿果』を舞台に作品発表をしていたことを、このたびはじめて知ることとなった。戦後、彼が「癩憲章」という詩で、国境を越えて「東洋の癩族」に連帯を呼びかけてうたった背景が、この事実から、戦時と戦後をつなぐ一本の糸となって立ち現れてくるのだ。

『万寿果』の復刻は、これまで私たちが見失いがちであった日本植民地下の台湾で生み出された未知なるハンセン病文学との新たな出会いの予感に満ちている。多くの読み手が生まれることを期待したい。（きむらてつや・国立ハンセン病資料館学芸員）

## 朝 西 羽 四 郎 寄 す

爽やかな双ざはりで 朝は  
メロンのやうな俺達の眠をさる  
今朝も小鳥は  
小さな囁りの断片を  
秋冷の空気の中に流しはじめた。  
友よ  
貧しい俺達の瞳にも  
世界はこんなにも明るい  
どこにも寝者の暮しはなく  
薄明りから朝は深まり  
太い 逞しい腕は  
出發する。  
パイヤの實<sup>みの</sup>の方へ  
白墨の粉の中へ  
友の呻吟する病室へ  
清冽な感動のある方へ  
一番星がかざり  
歴史よりも静謐な闇が  
溢れて来るまで  
俺達のさゝやかな決戦體制である

▲1921年に台湾で生まれた西羽四郎は、1938年2月に岡山県の長島愛生園に入所。戦時中、楽生院に転院してきた。戦後は小崎治子らと熊本菊池恵楓園に引揚げ、『菊池野』の編集に参加。「朝に寄す」は第10巻第2号（1944年1月）に掲載された。



小 風 船 玉

著 北 石 田 道 雄

こむ風船に竹の吹き口がつけられて、そのつけ根には、紅や黄や藍色の、鳥の毛が咲かせてあつた。風船そのものも種々の色あつて、七面鳥のびろのびろのやうなものが描いてあつて、ふくらませて見ると、馬にたたり無になつた。吹き口から息吹くと、「すーっ」といふやうなかなかな音が押し、風船を抱いてゐる兩方の手のひらは、その中に、いかにも健康にくんぐん大きくなつて来るものを感じた。氣のすむまでふくらますには、二三回は息をつがねばならなかつた。割れはしないかとびくびくものくせに、もう少しもう少しと吹いてみるのだつた。とどやら頬近く、馬の面などが現れてくると、お日様もいつか、その方に、豆つぶを貼された。のんびりと遠きとはつた向ふ側の

▲石田道雄による「小品 風船玉」（第10巻第1号、1943年8月）。子どもたちが祭りの屋台で「風船玉」を買って遊ぶ様子を描く。当時台北に住んでいた石田道雄（1909-2014）は後年、「ぞうさん」など多くの童謡、詩作品を残す「まど・みちお」。

▼楽生院内での楓移植のようす（第8巻第1号、1941年4月）。



推薦します

## The International Importance of *Papaya (Manjyuka)* —『万寿果』の国際的な重要性—

In spring of 1935, the first issue of *Papaya (Manjyuka)* was published by Rakusei-in, the name used to refer to Taiwan Sōtokufu Raibyō Rakusei-in (Rakusei Sanatorium for Lepers of the Governor-General of Taiwan). Today Losheng Sanatorium is the subject of a campaign to preserve the history of Hansen's disease and open new dialogues about colonial pasts, and the current republication of *Papaya* is an indispensable part of this process.

*Papaya* has several unique features that make it of interest to scholars in many fields. It is the only magazine regularly issued by a Japanese colonial Hansen's disease sanatorium, although there were institutions in Manchuria and Korea. Furthermore, its pages reveal how the sanatorium was imbricated in Japanese colonial policies that aimed to assimilate populations through management of language, culture, health, hygiene, and race, while still preserving difference. Primarily written in Japanese, *Papaya* is remarkable as a site of negotiation of what it meant for residents of the sanatorium to be part of the empire.

*Papaya* features many different kinds of writing: articles, essays, and reports by Japanese medical staff, the hospital director, or Taiwanese public workers are paired with essays, excerpts from other media, diaristic writing, songs, short literary pieces, and poems (Chinese language poetry, and Japanese-language free verse poems as well as *tanka* and *haiku*) written by residents, including children. The wide variety of writing forms in the magazine make it a critical resource for broad fields of scholarship and a mine of information unavailable anywhere else. Voices and perspectives that are omitted from conventional histories are recorded in these pages.

This is a crucial resource because it was connected to Japanese language media in Taiwan in a way that hospital publications in mainland hospitals were not. While each sanatorium in mainland Japan had a magazine, the dialogue between the hospital and mass media in mainland Japan was in some ways more limited. In contrast, excerpts from *Papaya* and in particular patient writing such as poetry

frequently appeared in newspapers and professional journals around Taiwan. *Papaya* also included excerpts from other sources in its pages, quoting from magazines or newspapers, as well as writing from residents of mainland Japanese sanatoria. *Papaya* therefore has a distinctly dialogic nature, with writing circulating between *Papaya* and other media.

*Papaya*, mainland institutional magazines, and collections of writing by patients all articulated imaginations of the Japanese empire, but in different ways. While all offer support for the Japanese empire, patient writing from Taiwan recorded the mundane performance of imperial citizenship in *Papaya*: raising the Japanese flag, singing the national anthem, enjoying Japanese cultural traditions, celebrating the emperor, using the Japanese language. *Papaya* is an exercise in becoming Japanese in Taiwan, maintaining difference while performing imperial citizenship.

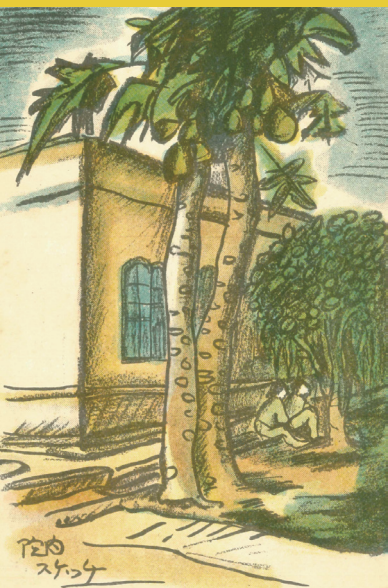
The republication of *Papaya* now allows scholars from all over the world to examine the ways in which imperial ideologies and health policies targeting Hansen's disease were articulated, and how ideas, experiences, and narratives about the illness circulated throughout the empire. The contemporary contested nature of Losheng Sanatorium makes the preservation of colonial history, resident voices, and the protection and availability of ephemeral materials or institutional publications such as *Papaya* crucial. In the republication of *Papaya*, Fuji shuppan has taken the important step of preserving a valuable part of that history, particularly the writing of residents of the colonial sanatorium.

For literary scholars, medical historians, and researchers of empire, these materials are invaluable. *Papaya* is a crucial part of Losheng's global legacy, and the republication allows readers see the ways in which *Papaya* was part of larger processes of biopolitical assimilation that maintained difference and ambivalence. Furthermore, *Papaya* demonstrates the ways in which Japanese Hansen's disease policies were always part of international dialogues, making this a vital international resource. In *Papaya*, readers can trace processes of cultural identification and shared affect in the daily lives of sanatorium residents, as well as understand how the colonial legacies recorded in *Papaya* still inform questions of reconciliation in Japan, Taiwan, and other parts of the world today.

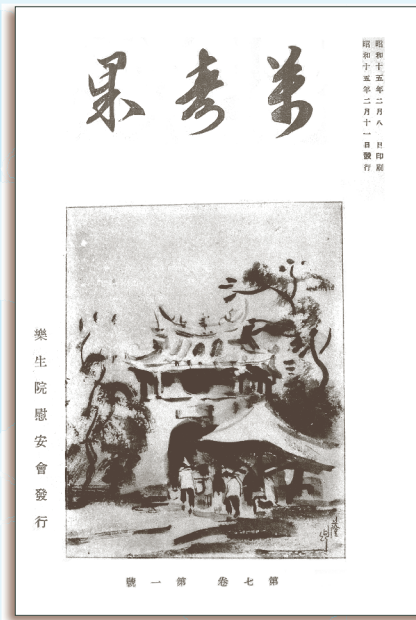
(田中キャサリン・兵庫県立大学准教授)



院内 スケッチ



院内 スケッチ



▲台湾の代表的な水彩画家のひとり、藍蔭鼎 (1903-1979) の作品も本誌の表紙を飾っている (第7巻第1号、1940年2月)。

▼余丙炭、林紅英、沈發達ら台湾本島人入所者の書き手たちも、日本語はもちろん、漢文、台湾語で寄稿した。下は余丙炭による「台湾に於ける古今救癩事業状態」(第4巻第1号、1937年3月)。清国時代における台湾のハンセン病患者の状況から、楽生院の現況をふりかえり。本誌には上川豊、林文雄ら医師・職員による楽生院の課題、「南方の救癩」に関する多くの記事も掲載されている。

臺灣は日本帝國の領土ならざる以前清國の版圖であつたといふことは増殖し御存じであらう。老翁の知る處に依れば清國も救癩事業を勵行し各都市に癩癰を設立して癩患者を收容して居た。然れども彼の救癩の施設は頗る幼稚にして今の生院に比すれば天地雲泥の差であつた。勿論癩癰の施設もなければ理想的の治療もない。そして患者に牛痘癩の徴収を興へ其の利益に依つて日常の生計費に供給するのであつた。牛痘癩徴収期間は四季につれて徴収するものなるれば癩癰を興へ其の利益に依つて日常の生計費に供給するのであつた。集金期が来るごとに如何なる病苦も辛抱して長い杖をついて毎に出頭して徴収するのである。其の憔悴たる状態世人の目撃するに及びや、手足の不自在のものは引つらうと願はれり全身にみみれ一種いふことの出来ぬは臭氣が世人を驚かすものもあつた。そして長い杖をついて足に粗末な破れ布を脚絆のやうに纏めるのを待つて四季だといふ見分けて退却したのであつた。往昔の癩患者は斯の如き悲惨なる生活を嘗みず、其の秋後期を見るまであつたらば只今楽生院に吾々は古の抽四季と比すれば、不幸中の幸福であるといはねばならぬ。臺灣は日本の領土になつてから四十餘年の久しに亘り、且つとも國營癩癰施設の現は日尚ほ遠き昭和五年のことである。之れ他國に比して救癩事業は癩癰か運りて居る。今へども癩癰所内の生活状態や治療等の完全なる設備は世界各國のそれに劣らぬと自居するのである。今や日本全國には國立及公私私立の癩癰施設を合せて二十餘箇所の大数に至つた。之れ全く榮へ行く御世の光輝であると深く感謝する。我等の幸してゐる樂生院は内科、外科、耳鼻科、眼科、歯科、注射部等に於て何れも患者の希望に據つて治療するものである。衣食住に至るまで百不足し餘ある設備は探せば、野球、野球、野球、センプン、其他々々奮奮し盡すのである。其上、皇太后陛下は非常御仁愛の御心厚く多大なる御内帑金を賜下賜進ばされ金々癩癰救癩の事業を御奨励遊ばされま

臺灣に於ける古今救癩事業状態

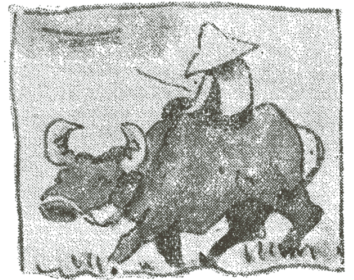
院内 余 丙 炭

# 余丙炭

# 宮崎勝雄

## 逃げ出した林徳壽

宮崎勝雄



山登り

宿命の病者ばかりが集り住む楽生院内の學園に居る學童等は、麗らかに晴れた今日の日曜に、限られた病院の構内だけ飛廻つてゐたのでは氣が濟まず、係員の眼を忍んでそこから外へ出てはならぬといふ境界線を突破し、輕症なものばかりが七人裏の山へハイキングに出かけたのである。今まで登つたことの無い憧憬の山、其所はまた見晴らしのいよき遊び場であつた。四月の太陽は雲の無い青空に輝き、色とりどりに芽吹いた木々、柔はらかに青み渡つた草の中には滾れたやうに草花が咲き、小鳥は樂しげに囀り交はしてゐた。遠く見晴るかせば紫はんだ中央山脈に連なる山、北に聳ゆる大屯や七星、その山々を背景として明るく展げた臺北平野、その平野を貫いて延々と流る淡水河、河に沿ふたる臺北市街、樹林の停車場や板橋の無電塔など手に取るやうに見ゆる、何といふ爽快な眺めであらう。頂上まで登りつめた彼等は期せずして萬歳を三唱し、愛國行進曲など唱ひはじめた。そして花を手折る者、柔かい艶々した草の上で相撲ふ者、思ひの遊びに耽つて時を經つのも忘れて了つた。院内生活で彼等の最も樂しみな活動寫眞、春秋二回の運動會それにも増した愉悅に彼等は浸つてゐるのだ。散々飛廻つて疲れたか、みんな一つ所へ集まると、こんどは、彼所はどこだらう。彼の山は何といふ山だらう。僕の家は彼の方向だ。僕の家へ行くには彼の汽車へ乗つて行くのだなどと騒いでゐたが、だん／＼憂鬱になつて黙り込んで了つた。不幸なる彼等が病院へ收容されて來た時は、他の見る眼も憐れなほど嘆き悲しんで食事さへしないものもあるが、恰度小島

▲宮崎勝雄 (1942年没) は、その死までの短い期間に多くの作品を残した。第7巻第4号 (1941年1月) に掲載された小説「逃げ出した林徳壽」は、「楽生学園」に通う入所児童の林徳壽 (13歳) が、友達をそそのかして実家へと脱走、父親と再会するまでを描いている。ほかに、「植民地台湾ならではともいえる」、「近頃覚へし國語あやつりて我をからかふ児等は笑ましき」などのすぐれた短歌を数多く残した。

